

兵隊の死

渡辺温

青空文庫

たのしい春の日であった。

花ざかりなるその広い原っぱの真中にカアキ色の新しい軍服を着た一人の兵隊が、朱い毛布を敷いて大の字のように寝ていた。

兵隊は花の香にむせび乍ら口笛を吹いた。

何という素晴らしい日曜日**を**兵隊は見つけたものであろう！——兵隊は街へ活動写真を見に行く小遣銭を持っていなかった**ので**、しかた為方がなく初めてこの原っぱへ来てみた**の**だった。兵隊は人生の喜びの**あり**かがやつと判ったような気がした。

兵隊はふと病気にかかっているのではないかと思つた。

兵隊の額の上にはホリゾントの青空の如く青々と物静かな大空があつた。

兵隊は何時しか口笛を忘れて、うつとりとあの青空に見惚れた。

兵隊は青空の水々しい横つ腹へ、いっぱつ鉄砲を射ち込んでやりたい情欲に似た欲望を感じたのだ。ああ一体それはどういふことなのだ？

兵隊は連隊きつての射撃の名手であつた。

兵隊は鉄砲をとりあげると、あおむけに寝たまま額の真上の空にねらいをつけてズドン

と射ち放した。

すると弾丸は高く高くはるかなる天の深みへ消えて行つた。

兵隊はやはり寝たまま鉄砲をすてて、そして手近な花を摘んで胸に抱いた。それからさて兵隊はスヤスヤと眠つた。

何分か経つと、果して兵隊のすぐれた射撃によつて射ち上げられた弾丸は、少しの拋物線をも画く事なしに、天から落下して来て兵隊の額の真中をうち貫いた。それで花を抱いて眠つていた兵隊は死んでしまつた。

シャアロック・ホルムズが眼鏡をかけて兵隊の死因をしらべに来たのだが、この十九世紀の古風な探偵のもつ観察と推理とは、兵隊の心に宿つていたところの最も近代的なる一つの要素を検出し得べくもなかつたので、探偵は頭をかいて当惑したと云う。

青空文庫情報

底本：「アンドロギユノスの裔」薔薇十字社

1970（昭和45）年9月1日初版発行

初出：「探偵趣味」

1927（昭和2）年1月号

入力：もりみつじゅんじ

校正：田尻幹二

1999年1月27日公開

2003年10月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

兵隊の死

渡辺温

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>